秋田の旅 2025

2025 年 2 月

旅のチカラ研究所　植木圭二

2 月、JR 東日本の冬期限定フリー切符を使って旅友たちと東北を 1 泊 2 日で旅してきた。雪によって 2 日目の旅程は大幅に変更されて目的のほぼ半分になったが、それでも満足できる旅になった。

■今年もキュンパスの旅

昨年とても好評だったので今年も JR 東日本の切符「キュンパス」が発売された。この切符は冬期限定で JR 東日本全域の新幹線も含めた乗り放題の切符で、昨年は 1 日券のみだったが今年は 2 日券も出た。今回はそれを利用する旅行計画を立てた。

行程は 2 日間乗り放題を最大限に活かし、東京駅から新幹線を使って途中下車をしながら秋田に行き泊まって、翌日は五能線の観光列車「リゾートしらかみ」に乗って青森を堪能するというものになった。

参加メンバーは、私が酒の師と仰ぐ“師匠”と、酒飲み系女史で日本酒大好きな“酒姫”と、高級小料理屋の元女将の“女将”、そして私を入れて 4 人になる。

4 人は鉄道旅では最適な人数で、ボックス席を陣取り、飲むことができる。いや、別に飲まなくてもいいのだが、4 人とも旅と酒が大好きな連中だからそうなるのは“当り前田のクラッカー”だ。おっと、ちょっと古かったか。

私たちは朝早く満席の東北新幹線に乗り込み、プシュッと缶ビールを開けて乾杯する。女将が作ってきてくれた豪華な朝食、いや、つまみ弁当を食べて上々のスタートを切る。

【女将が作った つまみ弁当】

■小峰城址

新白河駅で新幹線を降りて在来線に乗り換える。新幹線は満席だったが、こちらは閑散としている。在来線といっても東北本線なので、かつては東北地方を支える大動脈だったのに驚くべき光景だ。

乗客が少ないことよりもさらに驚いたことは、つり革広告がほとんどないことだ。広告がないということは景気が悪いことはもちろん、鉄道離れが深刻だと言っていいだろう。

このことをメンバーたちに伝えると、酒姫は「本当だ！」、女将は「ナニコレ陳百景よ！？」と驚いている。

【東北本線車内】

地方の実態を感じつつ列車に乗ること 3 分、白河駅で降りると目の前には「小峰城址」が広がっている。

この城は江戸時代までは天守閣があったが、明治維新の戊辰戦争で焼失した。東北の各藩は幕府側に付いたので多くの藩が新政府軍に敗れて悲哀を味わった。

近年になって三重櫓だけが昔の設計図から正確に再現された。

盛岡城と鶴ヶ城と並ぶ東北三名城と呼ばれるだけあって風情があって重厚感もある。

【小峰城の三重櫓】

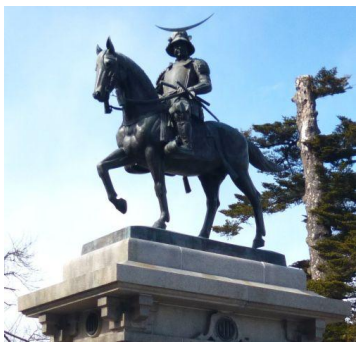
■青葉城

仙台で降りてタクシーで青葉城址を訪れる。

青葉城は伊達家 62 万石の居城で、仙台の街を見下ろす標高 130m の丘の上に築かれた。伊達政宗が築城する時に徳川家康に忖度して最初から天守閣を設けなかった。それなのに明治政府が出した廃城令で本丸にあった屋敷も取り壊され、屋敷の礎石と石垣だけが残った。

江戸幕府には忖度して、その因果から新政府にも見放された訳だ。東北の藩の悲哀をここでも感じることになる。本丸跡には伊達政宗の騎馬像が立っており、心なしか寂しそうに見える。

【本丸にあった屋敷の礎石】



【伊達政宗の騎馬像】

そんなことを考えながら城跡見物をしていたら、時間に余裕がなくなってきたことに気が付く。急いでタクシー乗り場に戻るとタクシーが 1 台もない。来た時には 3～4 台あったのにすぐにはけたようだ。そのうえ待っている人もいて、皆は慌てふためいている。予定通りの列車に乗れないと本日の計画が大幅に狂う。それだけでなく立席を覚悟しなくてはならず、一杯飲めないことを彼らが最も危惧しているのだろう。

10 分程待ってタクシーが来て何とか乗り込み。列車の発車時刻まであと 20 分、ギリギリのところだ。私は「運転手さん、時間ないのでお願いします」と頼み込む。運転手は状況を理解してくれたようだ。

助手席に座った師匠が運転手に「仙台の名所は青葉城以外ありますか？」と聞くと、「観光名所なんて何もないよ」と実にそっけない。運転手は「最近は中国人が多く、この前も 4 人乗ってきて、あまりにうるさいので警察署に寄ってそのまま渡してきた」とか言っている。これはあまりうかつなことを言わない方がよさそうだと皆は口をつぐむ。

運転手はアクセルを踏み込んで加速させ、信号の変わり目もお構いなく、スピードをどんどん上げている。女性陣は衝撃に耐える姿勢を取り始める始末だ。

そして仙台駅に着いたのは発車 5 分前。師匠が運賃を払い、私が早く降りてビールとおにぎりを買いにコンビニに走る。何とか新幹線ホームで落ち合うことができた。

■角館

新幹線を角館で降り、有名な「武家屋敷通り」にやって来る。私にとっては初めての角館で、雪景色の武家屋敷通りはなかなか風情がある。

それにしても寒い。雪がぱらついており、風がないのに寒さが身にしみて、“しばれる”という言葉がぴったり当てはまる。東北の冬を甘く見ていたというのが正直なところだが、それは今回の旅の少し前に極寒キャンプで猪苗代湖に行っていたからで、キャンプするならいざ知らず、列車に乗ってホテルに泊まるのだからあまり寒さ対策をしてこなかった。

歩いている人たちは観光客がほとんどで、外国人が半分くらいだろうか。この情緒ある雪景色は、特に雪の降らない国々の人にはたまらないのだろう。

【角館　武家屋敷通り】

武家屋敷と一括りにしても、実際に住んでいる家、カフェや博物館になっている家もあり、様々な屋敷がある。全体的な印象としては、どの屋敷も広々としており、裕福な武家の家並みと言っていいだろう。

小峰城や青葉城、さらにその奥のこの秋田でも武士は裕福に暮らしていたのだろう。それらの藩が江戸幕府を支え、それに胡坐をかいていたので江戸幕府は滅んだのかもしれない。

青柳家という屋敷があって、三千坪の屋敷を公開していると看板に書いてある。三千坪は正方形ならば 100m×100m だから結構広い。公開しているのは庭と建物で、建物の中には道具や秘蔵品といったものが多く展示されている。

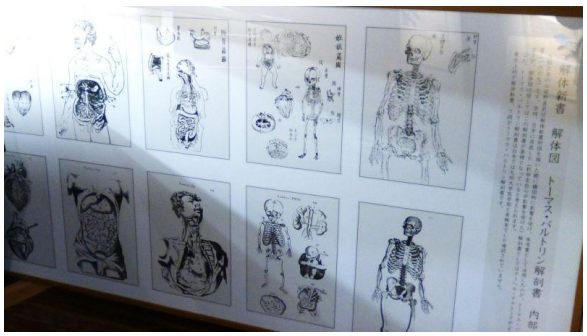
なぜか解体新書の図が展示されている。書いたのは角館の武士の小野田直武で、青柳家の親戚だという。私にとって解体新書は存在を知っているだけで、見たことがない。しかしこの展示では人体の内部が克明に描かれている。それだけでなく解剖をする様子まで描かれているから、あまりにリアルなので見るからにおどろおどろしい。

刀や武具も展示されている。本物の刀があって、持ってその重さを体験できる。結構ずっしりとして重い。こんなものを日常的に腰に付けて、戦の時は振り回していたかと思うと、昔の武士も大変だったに違いない。

昭和初期のレコードやカメラのコレクションというものまで展示しており、およそ武家屋敷とは関係ないものもあり、喫茶や売店もある。

入場料の 500 円は決して高くなく、私はもちろん皆も満足しているようだった。

【青柳家の敷地内】



【解体新書の図】

■全席座席指定の列車

当初の計画では角館から秋田までは在来線を乗り換えて行く予定だった。しかし在来線よりも数分早く秋田行の秋田新幹線こまちが来る。これに乗ると１時間早く秋田に着くことになる。

キュンパスは１日２回まで指定席が取れるが、私たちは本日分の指定席を既に取っている。秋田新幹線こまちは全席指定席で、このルールからすると乗ることができない。

しかし女性陣が「乗った者の勝ちじゃないの」と言っており、そして「車掌が何か言ってきたら、『ごめんなさいね。間違えちゃった』と言えばいいのよ」と腹が座っている。確かにそうだ、乗ってしまえば降ろされことはない。一応キュンパスは自由席新幹線には乗れるのでデッキに立っていれば問題ないはずだ。

私と師匠は女性陣に従うまま新幹線に乗り込む。すると席がいくつか空いている。そして車内放送が流れ、「盛岡から秋田までの区間は特別区間で席が空いていれば座席指定がなくても座ることができます」と言っている。

これは知らなかった。女性陣の厚かましさ、いや、ファインプレーに感謝だ。

角館の山間部から平野、そして住宅地になってきたが、雪が降り続いている。むしろ多くなっているようにも思える。私たちは明日乗る予定の五能線を走る観光列車「リゾートしらかみ」が運行するか心配になる。

何しろ今回の旅で、全席指定のリゾートしらかみの予約が一番取り難かった。1 か月前に師匠がネットで、酒姫が直接みどりの窓口で奮闘したが、一番人気の２号車ボックス席は取れなかった。その時の様子を師匠は「席が瞬く間に埋まっていき、かろうじて山側の席を確保するのがやっとだった」と言っていた。このように殺到した理由は、やはりキュンパスだろう。

■きりたんぽ鍋

秋田駅に着く。秋田と言えば、きりたんぽ鍋だ。私たちは少し高級な郷土料理店を訪れる。

注文を取りにきたのは、いかにもアルバイトという高校生くらいの若い娘で、それも本日がアルバイト初日のような振る舞いで、かなり心もとない。

着席と同時に、そのバイト娘に酒姫がビールを頼んだ。しかしビールが来る前に後から頼んだ“いぶりがっこ”が出てきた。ビールはどうしたかと聞くと、オーダーが入っていなかったらしい。慌てて先輩社員がビールを持ってくる始末だ。

バイト娘がきりたんぽ鍋を持って来て、卓上コンロに乗せる。そして女将が日本酒を注文する。

鍋が食べ頃になり、バイト娘が日本酒を持ってくる。多少遅いが今度は注文が通っていたようだ。

ここでまたバイト娘に対して、女将が「鍋に入っているこの太い髭のようなものは何？」と聞くと、バイト娘は「聞いてきます」と言って、しばらくして店長が説明に現れる。

【きりたん鍋】

店長は「これはセリで、この近くの三関という地域で“三関セリ”とう良質のセリが採れます。その特徴は白く長い根で、寒いのでゆっくり成長し、綺麗な水が根の生長を助けて葉や茎よりも根の方が長くなります。そのために根が非常に美味しく、この地域ならではのものです」と説明してくれる。

女将は「東京ではセリは根を付けて売っていないからね」と相槌を打っている。さらに店長は「こちらが比内地鶏で、ムネとモモの 2 種類の部位を味わって下さい」と付け足す。

そんな説明を聞くと何となく美味く感じるのが人間の性（サガ）というものだ。

確かに説明がなければ、有難味も分からずに味にも感動しない。料理には説明やウンチクは欠かせないことを痛感する。

■驚愕のビジネスホテル

今宵の宿「ドーミーイン秋田」にチェックインする。価格と大浴場が魅力でこのホテルを予約したが、この宿はとんでもなく凄いことが徐々に分かってくる。

まずはウエルカムドリンクがあって、コーヒーやソフトドリンク飲み放題になっている。まあこれはよくあることだろう。

部屋は小綺麗で清潔感がある。浴槽はなくシャワーのみとなっている。

部屋に浴槽がない理由は、最上階に大浴場があるからで、チェックアウトまで夜中も利用できる。ビジネスホテルによくある“とってつけたような大浴場”ではなく、本格的な温泉大浴場になっている。

泉質は高張性のアルカリ泉、高張性なので人体の体液濃度よりも温泉濃度が高いから細胞膜から温泉成分を吸収する。pH 8.3 のアルカリ泉で、石鹸のアルカリ度より多少弱い程度なのでヌルヌルして一般的には美肌の湯と呼ばれる。

大浴場以外に比較的大きな露天風呂もあってサウナと水風呂まで付いている。“熱血サウナー”を自認する酒姫は大喜びだ。

そして湯上り処にアイスキャンディーやアイス最中が置かれており、食べ放題になっている。このサービスも大きな温泉宿では珍しくないが、ビジネスホテルでは極めて珍しい。

極めつけは“夜鳴きそばサービス”で、21 時 30 分からホテルのスタッフがラーメンを作って出してくれる。といっても冷凍の麺を茹でて、醤油スープに入れて出すだけだが、無料サービスなのがありがたい。サイズもミニサイズではなくフルサイズに近く、もちろん美味い。何よりも小腹が空いたこの時間帯に温かいラーメンをホテル内で食べられることに感動する。

さらに売り切れた場合や 23 時を過ぎたら 1 時までオリジナルカップ麺「ご麺なさい」をフロントで渡してくれるという。もはや高級宿のサービスさえも超えている。

【夜泣きそばサービス】

朝起きて、大浴場で温泉に浸かって出てくると、昨夜のアイスキャンディーがヤクルトの無料サービスに変わっている。これも心にくい限りだ。

朝食はビュッフェスタイル、いわゆるバイキングで、いろんなものが小鉢に小分けして置かれている。小鉢に分かれているのでテキパキと取ることができる。そしてどれもが美味い。

「だまこ鍋」という汁物がある。スタッフに聞くと、「きりたんぽを団子にしたものが入っており、ネギやセリなどの野菜の他に鶏肉が入っている郷土料理です」と答えてくれる。

白米の他にカニ飯もあって、師匠は「カニがたくさん入っている」と喜んでいる。秋田名物の稲庭うどんもあって生姜を入れて食べるとこれがまた美味い。

もちろんパン食も用意されており、デザートも豊富で、ビジネスホテルの朝食の域を完全に超えている。

【ビュッフェスタイル朝食】

料理だけでなく、厨房や配膳スタッフたちが笑顔で挨拶してくれる。楽しく会話しながら仕事をしている姿が実にさわやかで、明るい気分にしてくれる。

■リゾート白神は運休

フロントでリゾートしらかみの運行状況を聞くと、スタッフは「観光列車で安全第一なので、本日は厳しいかもしれません」と言いながら PC を操作してくれる。そして少ししてから「リゾートしらかみは本日運休です」と言い、「何かお手伝いすることがありましたら、お伺いします」と、まるで一流高級ホテル並みの回答が返ってくる。

それを受けて私たちは作戦会議を開く。計画ではリゾートしらかみで五所川原に行って名物のストーブ列車に乗ってから、弘前で雪の弘前城を観るはずだったが、残念ながらそれは叶わない。

奥羽本線で弘前に行く方法もあるが、始発電車は除雪作業のために運休している。仮に動いたとしても途中で止まるとさらに厄介だ。
いろいろ検討した結果、秋田市内をもう少し巡ってから新幹線で東京に戻ることする。
時間に余裕ができたので、また温泉に入り、宿を出る。

秋田駅のみどりの窓口には多くの人々が待っている。若い女性駅員が「列車の変更ですか？」と聞いてきて、指定席の空き状況を照会してくれる。東京までの新幹線は時間が遅くなるほど満席で、どんどん空席が埋まっていく。師匠は「このパターンはリゾートしらかみの予約と似ている」と言っている。私たち誰もが秋田市内でのんびりできないと思い始める。
そんな時、幸いにもこの直ぐ後に出発する新幹線こまちならば、ボックス席は無理だが、通路を挟んで前後に 4 席確保できることが判明する。当然即決して新幹線に飛び乗る。

東京に帰って電光掲示板を見ると、東北新幹線の運行遅れの情報が流れている。
皆は「早く帰ってきて正解だったね」と言って、昼間の 3 時から打ち上げに突入する。断念した 2 日目の行程を取り戻すべく、打ち上げはいつになく盛大に行われた。

■温泉評価委員会
私は温泉宿を評価する温泉評価委員会、通称「おひょい」を立ち上げている。それは温泉宿に泊まった時に組織される勝手気ままな委員会で、委員は同行した人になる。
評価項目は泉質、風呂、料理、コスパ、サービス、建物・部屋、立地環境の 7 項目で、平均値を総合点としている。温泉は泉質と風呂で分けており、立地環境はかつて秘湯度という項目だったが、都市型の温泉もあるのでロケーションや景色を総じて評価するようにした。
評価基準は 5 段階としてその定義は、5 は驚き感動、4 は普通に良い、3 は可もなく不可もない、2 は普通に悪い、そして 1 は失望落胆としている。

ドーミーイン秋田は、泉質 4.75、風呂 4.25、料理 4.75、コスパ 5、サービス 4.75、建物・部屋 4.5、立地環境 4.25、総合点 4.61 になった。料理は朝食のみの評価になった。
湧出温度は 27.8℃、pH 8.3、泉質はナトリウム-塩化物-炭酸水素塩温泉（高張性・アルカリ性・低温泉）だった。

■旅の記録
実施は 2025 年 2 月 20 日（木）～2 月 21 日（金）の 1 泊 2 日で、その行程を示す。尚、本文と行程の順番が違っているが、こちらが正しい。
・1 日目　東京駅 6:40（やまびこ）→8:03 新白河 8:42→8:45 白河、小峰城見学
白河 9:55（東北本線）→10:31 郡山 10:59（やまびこ自由席）→11:34 仙台、
タクシーで青葉城往復、仙台 12:53（こまち）→14:20 角館、「武家屋敷通り」散策
「青柳家」見学、角館 16:21（こまち）→17:08 秋田、
「ドーミーイン秋田」チェックイン、外出し「本家あべや」で夕食、ホテルに戻る
・2 日目　10 時に宿を出て 11:07（こまち）→15:04 東京、新橋で打ち上げ、解散

1 人当たりの費用総額は約 38000 円、詳細を以下に記す。（全て 1 人当たりの費用に換算）

・交通費　　18000 円（キュンパス購入費用）
・タクシー代　　約 1500 円（仙台駅から青葉城往復）
・宿泊費　　7830 円（朝食付きツインルーム）
・入館料　　500 円（角館の青柳家）
・夕食　　約 4500 円（ビール酒含む）
・酒つまみなど　　約 3000 円（つまみ、おにぎり、ビールなど）
・打ち上げ　　約 3000 円